地吹雪

小檜山博

地吹雪

小檜山博

河出書房新社

地吹雪（じふぶき）

© 1982
Printed in Japan

一九八二年八月二日　初版印刷
一九八二年八月六日　初版発行

著者　小檜山（こひやま）博（はく）

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
営業　〇三―四〇四―一二〇一
電話　編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷　三松堂印刷株式会社
製本　中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

第一部　地吹雪　5
第二部　雪　虫　97

裝幀＝司　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

地吹雪

第一部　地吹雪

本や衣類でダンボオル箱三個ぶんしかなかった。スチイル製の本箱と坐り机は、仕切り段や引き出しが動かないようにガムテエプを貼った。最後に一組きりの夜具を蒲団袋に詰めた。それで荷物は全部だった。

引っ越しには近くの廃品回収屋からリヤカアを借りた。荷物の内容を聞いた廃品屋のおやじが、そんなもんなら乳母車で間に合うべや、と笑った。耕次もしかたなくいっしょになって笑った。

リヤカアを引っぱって一条橋を渡り、時計台の前を通って北一条を西へ歩いた。道の両側に並んでいるアカシアの木に白い花が房になって下がっていた。葉の隙間からこぼれ落ちてくる光が、アスファルトの上ではじけた。初夏だった。正面に見える円山が濃い緑に太っていた。

新しい下宿まで二時間かかった。玄関へ着くと五十くらいの奥さんが出てきて、さあどうぞ、お待ちしてました、と言ってふちのない眼鏡を押し上げた。微笑していた。髪に三分の一ほど白髪が混じっている。細い軀に濃い茶の和服が似合った。耕次はしどろもどろに挨拶した。

部屋は玄関を入ってすぐ左わきにある四畳半だった。取り替えたばかりらしい畳がよくにおった。耕次は荷物をリヤカアから降ろして部屋へ運び入れた。

——下宿などしたことはないんですが、課長さんとはずっと親しくさせていただいてますもので。と奥さんが押し入れの戸を開け、中を覗き込んで言った。耕次が勤めている印刷工場の課長だった。

——ほんとに助かります。と耕次は机の置き場所を考えながら言った。歩くと、畳が足の裏をはじき返してくるようだった。奥さんはカアテンをあけたり締めたりしてレエルのすべり具合を見上げながら、家族のことを喋った。ご主人が航空会社の営業部長だということは知っていた。二人いる娘は上が雑誌の編集者で下が洋装店のデザイナアだと言った。両方ともおてんばだから気をつけてください、と奥さんは苦笑した。耕次は壁へ立てた本箱の下へ折りたたんだ新聞紙をはさみながら、そうですか、そうですか、とこたえた。

ダンボオル箱のガムテエプをはがし、予備校で使っているテキストや辞書を出して本箱へ立てる。

——感心ですね、働きながら勉強するなんて。と奥さんが窓をあけながら言った。

——ほかにやることないもんですから。

耕次は首をかしげて苦笑した。あけた窓からライラックのにおいが入ってきた。窓枠の中に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

濃緑の円山が浮いていた。木の一本一本まで見えた。山の左上にある太陽が橙がかっている。西陽だった。奥さんが窓辺へ屈み込んで敷居の埃を吹いた。

からになったダンボオルをたたんだあと、蒲団袋をほどいた。薄っぺらな蒲団を奥さんに見られるのが恥ずかしく、大急ぎで押し入れへしまった。窓の左手にある庭の木立ちで二、三羽の小鳥が鳴きだす。ツグミの声だ。耕次は壁に掛けた学生服の内ポケットから一ヵ月ぶんの下宿代を出して奥さんに差し出した。

――いいんですよ、その月の終わりで。と奥さんはしかたなさそうに眉を寄せて受け取った。

机の前の壁へ、カレンダアと予備校の時間割を貼った。部屋はすぐに片づいた。奥さんが出て行くと、ジャンパアのポケットに入れておいた千絵からの手紙を出して封を切った。前の下宿を出てくるとき配達されたものだった。窓の敷居へ腰かけて読む。駅へ迎えに出ます。六時半に、改札口を出たところの左側にある売店の横にいます、と書いてあった。耕次が先週出した手紙で、朝までいっしょにいてほしいから両親には友達のところへ泊まると言って出てくるように、と書いてやったことにはこたえてなかった。受験勉強がんばって、と二回も書いていた。耕次は小さい舌打ちをして手紙を机の上へ投げた。

円山の森の繁みでカッコウが鳴いた。よく響いた。五回ほどつづいてやんだ。陽の沈んだあたりの西の空が血をぶちまけたみたいだった。窓の下にある白いライラックの花が赤っぽく染

まっている。呼吸のたびに花のにおいが頭の芯へしみ込んだ。

門の前でタクシイがとまり、腹の出た男が降りた。髪の生えぎわが白かった。門を入ったところで両手を後ろへ組み、ゆっくり石畳を歩いてきた。両わきに植わっているサクラ草やチュウリップを見おろし、時おり屈み込んで手を伸ばした。

耕次は窓の敷居から尻を浮かせて部屋の中へ戻った。手持ちぶさただった。壁や天井を見回した。螢光燈の球や傘に埃を拭いた跡があった。胸ポケットから煙草を出して火をつける。机の前へ坐り、引き出しを上から順にあけて灰皿を探した。隅に芯の折れた鉛筆やオデン屋のマッチがかたまっていた。埃まみれだった。その下にセエラア服を着た千絵の写真がのぞいている。ことしの春、高校を卒業するとき写真屋で撮ったものだということだった。耕次はそれを出して膝へ伏せ、埃をぬぐった。おかっぱ頭の千絵は、眼を驚いたように見開いてこっちを見ていた。濃い二重瞼が好きだった。唇をきつく締め、笑いをこらえている顔つきをしていた。耕次は鼻をふくらませて笑った。

玄関の扉が開く音がし、若い女の声で、ただいま、と叫んだ。茶の間のほうで奥さんが返事をした。耕次は写真を引き出しへ入れ、ついでに千絵の手紙もいっしょにしまった。玄関で男の低い声がした。若い女の声が、いいのいいの、と言っている。茶の間の戸が開閉するたびに、かすかにテレビの音がした。予備校で使っている英語のテキストを持って、また窓の敷居へ腰

かけた。庭の草花の根もとをうっすらした暗さが這い広がっていた。黒くなった山から空へカラスの鳴き声が湧きのぼっている。耕次はテキストを開かないまま机の上へほうり投げた。空腹だった。台所のほうで鍋やセト物の触れ合う音がしつづける。時おり茶の間で若い男の笑い声が起こった。

入り口の戸を叩く音がした。奥さんが、お食事ですから茶の間へいらっしてください、と言った。耕次は立ちながら返事をし、窓を閉めた。よれよれのジャンパアを脱ぎ、高校のときから着ている学生服に着替えた。下は色のあせた紺のジイパンのままだった。

茶の間へ入るともう家族の者が長方形の食卓を囲んで坐っていた。待っていたらしく、まだ箸は持っていなかった。二人の男はあぐらをかき、二人の女は正座していた。耕次は入り口を入ったところで絨毯に膝と手をつき、低い声で名前を言った。

——さあ、お坐りなさい。と主人が食卓のあいている場所へ視線をやった。台所から盆でビイルを二本運んできた奥さんが、十九歳ですって、と言った。

——うわぁ、うらやましい。と髪を胸まで伸ばしている女がおどけた声をあげた。耕次は眼を伏せて食卓のそばへ歩いた。

正座しかけて頭をひねり、途中からあぐらにした。耳が火照った。

——下宿屋ではありませんので行き届かないかもしれませんが、かんべんしてください。と

奥さんが栓抜きを夫に渡しながら言った。耕次は口の中でぼそぼそ言って頭を深く下げた。かすれ声になった。主人がコップを持ち上げ、それに合わせてみんなが自分のコップへ手を伸ばした。よく冷えていた。ベランダでシジュウカラの声がした。

奥さんの横にいる姉らしいほうが唇の泡を拭きながら、うちに男の兄弟いないからちょうどいいさ、扱い方わかんないけど、と笑った。父親を見ていた。それから、わたし長女のカズエ、すでに二十六歳、と言った。言ってから顔を上向け、声をたてて笑いだした。その隣にいる髪の長いほうの女が、歳まで言うの？　と横目でカズエを睨んだ。口が尖っていた。首をかしげ、ちらっと耕次を見上げてきた。

――妹のマサコ、二十三歳。

肩を持ち上げ、すばやく舌を出した。耕次はコップへ伸ばしかけた手をあわてて膝の上へ置いた。からだった。斜め前にいるカズエが箸を置き、ビイル瓶を持った。ワカメの味噌汁を啜る音がする。奥さんが、娘たちの名前は和恵と真砂子と書くのだと文字の一字一字まで説明した。背筋を伸ばし、二人を代わるがわる見おろすようにした。真砂子の横にいる若い男が箸で刺身をはさみながらニヤニヤ笑う。父親がキュウリの酢もみを口へ入れて顔を上げ、男を見た。

――あ、このひとね、真砂子の恋人で、旭川の高校の先生してます。と言った。

男が耕次に向かって頭を下げ、名前を言った。和恵が男の声音をつかって、はや二十八歳、

とつづけた。男がうつむき、声をたてないで笑った。耕次は黙って上半身を前へ倒した。首が汗っぽかった。眼の前へビイル瓶の口が突き出てくる。真砂子の恋人だった。札幌に実家があるので時どき帰ってくる、と男は言った。

——真砂子が呼び寄せてるのかも。と和恵がひやかした。

——姉ちゃんたら。と真砂子が下唇を噛んで睨んだ。眼のまわりが赤かった。

——昼間つとめて夜、予備校へ通うなんて、たいへんなことですよ。と父親が男を見て首をひねった。男が刺身を噛みながら小刻みにうなずく。

——どういうお仕事ですか。と男が話を耕次に向けた。左手でネクタイをゆるめている。

——活字ひろいです。

ご飯茶碗の中を見つめたままこたえた。眉が寄った。耳たぶが熱かった。奥さんが、ほんとにえらいわねえ、と言った。それで話が跡切れた。和恵が真砂子の方を向き、あんたの店で安いワンピイス見つけといてくれない？　水色の、と聞いている。父親が男を見て、沖縄の初めての知事が決まりましたねえ、と話をそらせた。耕次は味噌汁をひと息で飲んだ。

部屋へ戻ると、柔道の受け身でもするように左肩から畳の上へ倒れて仰向けに寝転がった。ひどく疲れた。酔いが足らず、腹もまだすきぎみだった。眼の裏で真砂子と和恵の顔がちらちらした。

起き上がって学生服を脱ぎ、窓をあけた。星空だった。よくまたたいた。遠くから洪水みたいに蛙の声が聞こえてきた。円山が真っ黒だった。入り口の戸を叩く音がし、和恵が果物を持ってきたと言った。戸をあけると、半分に切ったメロンの載っている皿を差し出した。サジがカチカチ鳴った。いやあ、と耕次は伸ばしかけの短い髪を撫でた。

――テレビ、いつでも茶の間へきて見てくださいって。

和恵は急いでいるように戸を閉め、廊下を走っていった。耕次はメロンの皿を机の上へ置き、蒲団を敷いた。それから押し入れのダンボオル箱に入っている酒の二合瓶とコップを出し、机の横へ坐った。壁へもたれ、窓枠の中の暗い空を見ながら酒を飲んだ。メロンをおかずにした。千絵の写真を出し、胸のふくらみと唇を代わるがわる見つめた。長いことそうしていた。少しずつ軀の底にある澱みがふくれあがり、動いた。闇に浮いている星が、濡れたようにまたたいた。

机から便箋と万年筆を出して畳へ腹這いになり、千絵への手紙を書いた。途中から動悸がしはじめ、呼吸が荒れた。性器が硬かった。口が乾き何度も唾を飲んだ。

汚れて曇りガラスみたいになっている工場の窓ガラスに、雨粒が当たっている。係長がきて、あがっていいぞ、と言った。耕次は広報の原稿と、途中までひろった活字の小箱を置き、洗面

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.